

2021(令和3)年上半期の わが国周辺の漁海況の特徴について

目 次

要約ー2021年上半期のポイント	1
1. わが国周辺の海況	3
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向	4
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ	5
(2)さば類	6
(3)マアジ	6
(4)カツオ	7
(5)ビンナガ	8
(6)スルメイカ	8

2021年7月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター
(JAFIC)

要約－2021年上半期のポイント

● わが国周辺の海況

- ・ 日本近海の海面水温は長期的には上昇傾向を示しており、2021年上半期は、冬季には北部で寒気の影響で近年(2011～2020年平均)より低めの海域もあったが、以降はおおむね高めであった。
- ・ 親潮の勢力は、1～2月には平年(1993～2017年の平均)より強めの時期があったが、それ以外はおおむね平年より弱めであった。
- ・ 道東沖の暖水塊は6月まで釧路南東沖に停滞し、海面水温はおおむね近年並であった。しかし7月以降は北東に移動し、不安定な状態となっている。
- ・ 黒潮続流は常磐北部沖～金華山沖まで北上し、常磐沿岸には期間を通して暖水が波及し海面水温は近年より高めであった。
- ・ 2017年秋季に始まった黒潮大蛇行は、今期も継続したが、2月の九州南方での冷水渦の再結合等もあり、流路の変動は大きかった。
- ・ 対馬暖流の勢力は、おおむね平年より強く、大和堆付近まで北上する沖合の流路を示すことが多かった。このため海面水温は、大和堆付近を中心に沖合で近年より高めであった。

● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・ 全国主要108港における2021年1～5月の調査対象全魚種の累計水揚量は、前年同期並みの76万2千トン、平均価格は前年同期比96%の161円/kgで、水揚量・平均価格ともに2016年以降では最低となった。
- ・ 魚種別にみても、1,000円/kg以上の高価格魚を含め、水揚量・平均価格ともに新型コロナウイルス流行前の2019年同期を下回るものが多く、コロナ禍による需要減少の影響が示唆される。

● マイワシ

- ・ マイワシの全国主要港における本年6月末現在の水揚量は27.8万トン(太平洋側25.2トン、日本海側2.6万トン)で、前年同期(28万トン)を約2千トン下回った。
- ・ 太平洋側では、2、3歳魚中心に好漁であったが、4歳魚以上の漁獲は少なかった。
- ・ 犬吠埼付近では、漁期が長く6月下旬まで好漁が続いた。
- ・ 日本海側では隠岐海峡周辺での漁獲が3月ごろから1歳魚中心に続き、境港では6月に1万トンを超える水揚げがあった。

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・ さば類の全国主要港における本年6月末現在の水揚量では21.7万トン(太平洋側16.7万トン、東シナ海・日本海側5万トン)で、前年同期(19.3万トン)を上回ったものの、2016年以降では2番目に少なかった。
- ・ 太平洋側では前年末から漁期が続き1～3月の水揚量が多かった。
- ・ 前年同様、日向灘まで大型の産卵群が南下した。
- ・ 東シナ海・日本海側では1～3月は対馬海域～浜田沖で前年を上回る漁獲があったが、4月以降は低調となった。

● マアジ

- ・ マアジの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 3.7 万トン(太平洋側 0.4 万トン、東シナ海・日本海側 3.3 万トン)で、前年同期(4.7 万トン)を下回った。
- ・ 日本海側では 5 月ごろから浜田沖で漁獲が続き、浜田港における 6 月の水揚量は前年を上回った。
- ・ 東シナ海側では 5~6 月は中南部海域で操業が行われたが、水揚量は前年を下回った。

● カツオ

- ・ 竿釣り漁業の主漁場は、例年の春先は伊豆・小笠原海域であるが、本年は九州・沖縄海域となった。
- ・ 5 月以降の竿釣り漁場は房総南東沖から常磐沖へと北上し、6 月までの全国水揚量は 13.7 千トン(前年比 220%)で、前年とは打って変わって全国的に好漁となった。
- ・ 前年は魚体組成が例年と異なり、中型(2.5~3.0kg)が少なく、特大型以上(4.0~10.0kg)と小型(1.0~2.5kg)が主体となったが、本年は通常の水揚組成に戻った。
- ・ まき網は 5 月から水揚量が急増し、6 月の全国水揚量は近年では最高水準(9,644 トン)となった。

● ビンナガ

- ・ 竿釣りともき網による生鮮ビンナガの全国主要港における本年 6 月までの累積水揚量は 5 万 5 千トンで、好漁だった前年の 72%にとどまったが、2019 年以前と同程度となった。

● スルメイカ

- ・ 全国主要港における本年の生鮮スルメイカの水揚量は 6 月末現在 3.5 千トンで、前年同期(8.3 千トン)および 2016~2019 年同期の平均値(6 千トン)を大きく下回った。
- ・ スルメイカは例年 5~6 月に能登半島沿岸で小型いか釣りの漁獲対象となるが、水揚量は低調で、小型サイズが目立った。
- ・ 大和堆周辺を主漁場とする冷凍スルメイカの本年上半期の水揚量は 2.3 千トンで、前年(1.0 千トン)、2017~2020 年同期の平均値(1.3 千トン)を上回った。
- ・ 今期の対馬暖流の流路が沖合化したため、スルメイカが沖合域を北上したと推察される。

1. 2021 年上半期の日本近海の海況

2021 年上半期の海面水温は、冬季は北部で寒気の影響で近年(2011~2020 年平均)より低めの海域もあったが、以降はおおむね高めであった。

1) 黒潮域・東シナ海

2017 年秋季からの始まった黒潮大蛇行は今期も継続したが、2 月の九州南方での冷水渦の再結合(図 1A)等もあり、流路の変動は大きかった。黒潮域の海面水温は四国~紀伊半島沖では黒潮蛇行内側の冷水渦の影響で近年より低めであったが、遠州灘~熊野灘(図 1B)は暖水波及により高めであった。本州南方沖は、気温が高く風も弱かった影響でおおむね近年より高めであったが、6 月には台風の影響で低めの海域もみられた。

東シナ海は、冬季に季節風の影響で近年より低めの時期もあったが、おおむね高めで推移した。

2) 親潮域・混合水域

親潮の勢力は、1~2 月には平年(1993~2017 年の平均)より強めの時期があり、三陸では水温が近年より低め(図 2)であったが、それ以外はおおむね平年より弱めであった。

黒潮続流は常磐北部沖~金華山沖(図 1)まで北上し、常磐沿岸(図 1C)には期間を通して暖水が波及し海面水温は近年より高めであった。三陸沖(図 1-④)では 3 月以降、続流北上部から暖水が波及して暖水渦が形成され、近年より海面水温は大幅に高め(図 2)で推移し、4 月にピークに達した。一方、三陸沿岸(図 1-③)の海面水温は三陸沖の暖水渦の離接岸や、一時的な親潮の拡大の影響で 5 月に近年より低めになるなど変動が大きかった。

道東沖(図 1-⑤)の暖水塊は 6 月まで釧路南東沖に停滞し、一時的に暖水や親潮拡大の影響もみられたが、海面水温はおおむね近年並であった(図 2)。しかし 7 月現在は北東に移動し、不安定な状態となっている。

3) 日本海

対馬暖流の勢力は、おおむね平年より強く、大和堆付近まで北上する沖合の流路を示すことが多かった。このため海面水温は、期間を通して大和堆付近(図 1-①)を中心に沖合は近年より高めで(図 2)、4 月にピークを迎え、その後一時的に近年並に戻ったが、7 月には急上昇した。

東朝鮮暖流(図 1-②)も期間を通して勢力が近年より強く、海面水温は 6 月に近年並になったものの、他の期間は近年より 1~2°C 高い状態が続いた。

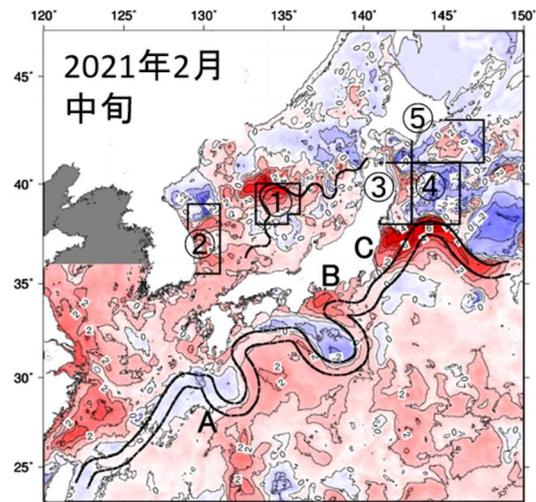


図 1-1. 2021 年 2 月中旬の海面水温の近年差

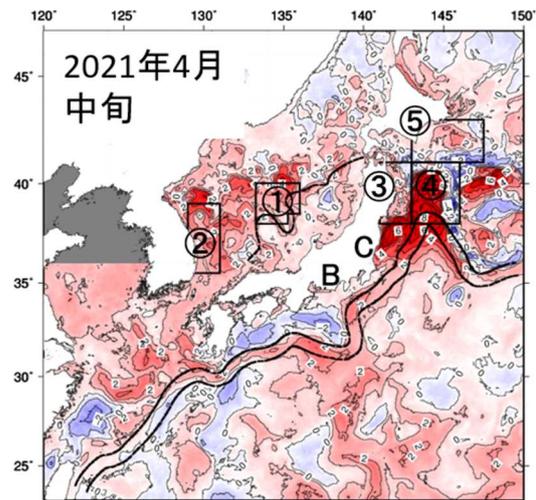


図 1-2. 2021 年 4 月中旬の海面水温の近年差

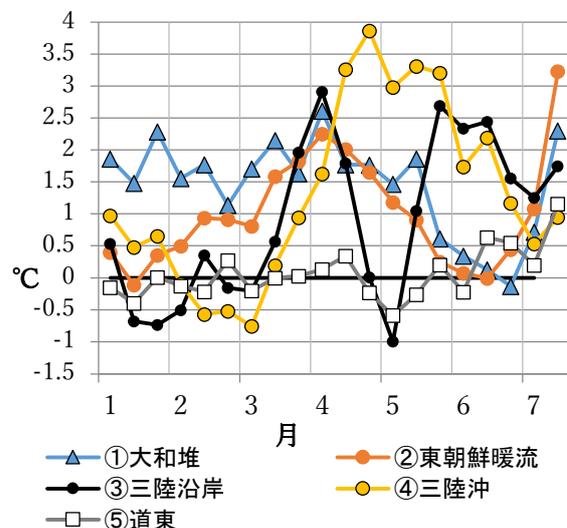


図 2. 海域毎の海面水温の近年差(各海域の範囲は図 1-①~⑤参照)

4) 今後(夏～秋)の見通し

黒潮大蛇行は継続するが、5月に続流域で切離された冷水渦が関東東沖で黒潮流軸に接近しており、8月上旬～中旬頃に黒潮流軸と冷水渦が結合する可能性がある。この場合は房総半島沖には冷水渦の南側に沿うような東向きの流れがみられ、続流北上部は暖水渦として切離されると思われる。

海面水温は、7月に入り各海域共に上昇し近年より高めとなっており、気温も平年より高めとの気象庁の1ヵ月予報も出ていることから、しばらくは近年より高めの状態が継続する見込みである。親潮域では三陸沖の暖水渦が引き続き停滞する見込みであり、この暖水渦周辺から道東海域に暖水が波及する事もあるため、今秋の親潮の南下は沖合分枝が中心で、沿岸分枝は南下を妨げられる可能性が高い。

日本海の海面水温も、今後しばらくは高めが続くと思われるが、特に北部では、水温が高いのは表層のみであるため、台風等により急激な海面水温の低下もありうる。

2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

JAFICが調査している全国主要108港における2021年1～5月の調査対象全魚種の累計水揚量は76万2千トンで、前年同期(78万トン)の98%であった。平均価格は161円/kgで、前年同期(167円/kg)の96%であった。水揚量・平均価格ともに2016年以降では最低となった。本報告の水揚量と価格はJAFIC「おさかなひろば」による。

主要48魚種の2021年1～5月の魚種別の累計水揚量と平均価格を新型コロナウイルス流行前の2019年同期と比較した(図3、表1)。水揚量・平均価格ともに2019年同期を下回った魚種が多かった。そのうちウルメイワシや生鮮メバチなど14魚種は水揚量が減少したにもかかわらず、平均価格を下げ、うち1,000円/kg以上の高価格魚は3魚種であった。

水揚量は、マイワシ、生鮮カツオ、ギンザケ(養殖)など15魚種が2019年同期を上回り、ヤリイカ、冷凍メバチなど6魚種は2019年同期並み、さば類、マアジ、生鮮スルメイカなど27魚種は2019年同期を下回った。平均価格は、ニシン、クロマグロ、アカムツ(ノドグロ)の3魚種が2019年同期を上回り、さば類、マアジ、かれい類など14魚種が2019年同期並み、

生鮮カツオ、ビンナガ、キンメダイ、トラフグなど31魚種が2019年同期を下回った。

2021年1～5月は、新型コロナウイルス流行前の2019年と比べ、全般的に安値基調で、平均価格を下げた魚種が多く、コロナ禍による外食や観光需要をはじめとする需要減少が影響したものとみられる。新型コロナウイルスの流行は続いているものの、2020年と比較すると2019年との価格差は縮小しており、今後価格は徐々に回復することが期待される。

表1. 2021年1～5月の産地魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)。(新型コロナウイルス流行前の2019年1～12月の平均価格の昇順に並び、1,000円/kg以上の魚種を赤字で示した。)

	1～5月						1～12月
	2021年		2019年		2019年比		2019年
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格	価格
マイワシ	201,320.2	38	190,287.0	42	106%	92%	41
ニシン	1,981.3	81	4,243.7	56	47%	146%	52
カタクチワシ	5,016.9	40	11,945.9	52	42%	77%	57
スケトウダラ	47,647.4	54	38,935.5	76	122%	71%	58
ウルメイワシ	9,733.6	60	11,857.5	67	82%	89%	76
ホッケ	6,925.8	78	2,884.3	105	240%	74%	81
さば類	207,753.8	100	242,559.6	100	86%	100%	105
ほたてがい殻付	8,334.9	160	10,176.2	166	82%	96%	158
冷カツオ	78,502.5	178	83,501.0	178	94%	100%	171
マダラ	15,363.3	173	18,817.2	199	82%	87%	226
マアジ	31,764.0	188	37,495.6	195	85%	97%	230
ブリ	15,766.5	178	19,443.7	290	81%	61%	241
生カツオ	13,752.4	265	10,106.7	381	136%	70%	306
冷キハダ	11,404.1	301	24,833.8	339	46%	89%	311
かれい類	5,516.3	256	6,309.8	264	87%	97%	314
サンマ	1.6	240	20.7	355	8%	68%	317
ヒラマサ	372.8	574	354.0	665	105%	86%	472
ビンナガ	13,402.3	310	9,542.6	464	140%	67%	478
さわら類	1,598.6	691	1,054.7	676	152%	102%	530
マカジキ	401.9	528	584.7	653	69%	81%	562
たこ類	1,892.1	515	1,889.9	607	100%	85%	575
生スルメイカ	2,216.1	601	2,914.8	608	76%	99%	644
ギンザケ(養殖)	2,896.2	635	2,056.1	743	141%	85%	665
サザエ	110.1	666	173.9	722	63%	92%	671
マダイ(天然)	1,966.2	433	2,021.0	761	97%	57%	723
ヤリイカ	1,383.1	773	1,352.1	748	102%	103%	732
生キハダ	3,985.5	751	4,605.9	843	87%	89%	750
メジマゴロ(ヨコワ)	147.1	923	113.0	1,075	130%	86%	753
あなご類	188.3	707	294.6	770	64%	92%	759
ハマチ(養殖)	113.6	674	111.3	846	102%	80%	781
冷メバチ	10,195.4	765	10,248.0	832	99%	92%	812
冷スルメイカ	1,169.6	660	947.8	702	123%	94%	886
マダイ(養殖)	183.7	580	103.2	979	178%	59%	910
ヒラメ(天然)	619.3	777	708.1	1,035	87%	75%	979
アカムツ(ノドグロ)	142.6	1,257	276.4	798	52%	158%	1,069
メカジキ	1,234.8	1,106	1,255.2	1,133	98%	98%	1,094
生メバチ	1,551.8	989	2,031.1	1,173	76%	84%	1,131
キンメダイ	695.7	1,294	739.9	1,594	94%	81%	1,658
クロマグロ	814.2	2,531	1,758.1	1,702	46%	149%	1,680
冷ミナミマグロ	1,580.0	1,759	1,332.3	1,806	117%	97%	1,738
ヒラメ(養殖)	22.5	1,157	5.5	1,846	410%	63%	1,934
あまだい類	74.3	1,795	63.7	2,160	117%	83%	2,118
キンキ(キチジ)	292.9	2,242	402.2	2,303	73%	97%	2,798
イセエビ	21.3	4,500	28.7	4,447	74%	101%	4,345
クルマエビ	3.8	5,531	8.9	5,294	43%	104%	4,754
トラフグ	63.2	4,492	75.7	5,386	84%	83%	5,559
あわび類	10.6	6,555	18.7	6,493	57%	101%	7,690
うに類(剥き身)	68.5	6,607	65.4	10,696	105%	62%	13,312

歳魚)主体に、道東沖で漁獲が続くと考えられる。日本海側では隠岐海峡周辺での漁獲が3月ごろから続き、境港では6月に1万トンを超える水揚げがあった。水揚物の体長は18cm前後であった。前年は6月ごろから0歳魚の水揚げがあったが、本年は見られなかった。価格は近年では低水準で推移した(図5)。

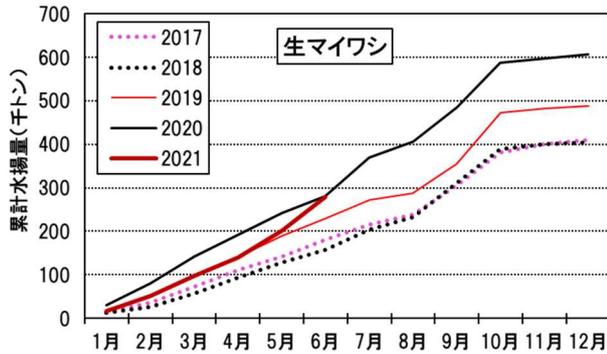


図4. 2017～2021年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚量の推移

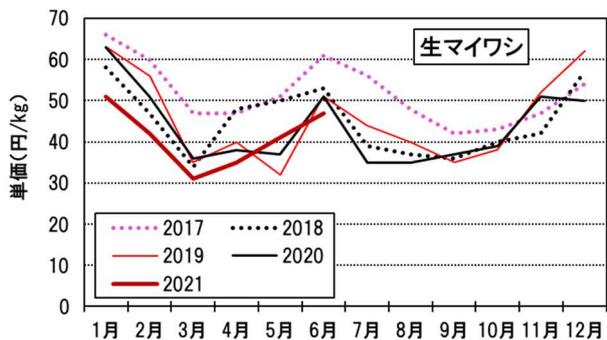


図5. 2017～2021年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

(2) さば類(マサバ、ゴマサバ)

さば類の全国主要港における本年6月末現在の水揚量では21.7万トン(太平洋側16.7万トン、東シナ海・日本海側5万トン)で、前年同期(19.3万トン)を上回ったものの、2016年以降では2番目に少なかった(図6)。太平洋側では前年末から漁期が続き1～3月の水揚量が多かった。前年同様に日向灘まで産卵群の来遊があり、宮崎県北浦では3月には、前年を下回ったものの2.6千トンの水揚げがあった。今後は道東まき網でわずかに混じり、11月ごろからは八戸沖～石巻沖にまき網漁場が形成されると考えられる。東シナ海・日本海側では1～3月は対馬海域～浜田沖で前年を上回る漁

獲があったが、4月以降は低調となった。今後は年度後半まで低調な漁況が続くと考えられる。価格は近年では高水準で推移した(図7)。

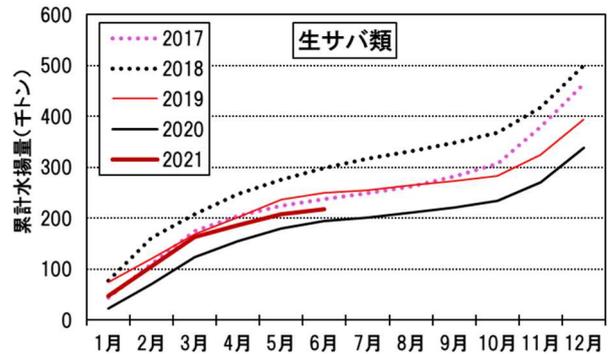


図6. 2017～2021年の全国主要港における生鮮さば類の月別水揚量の推移

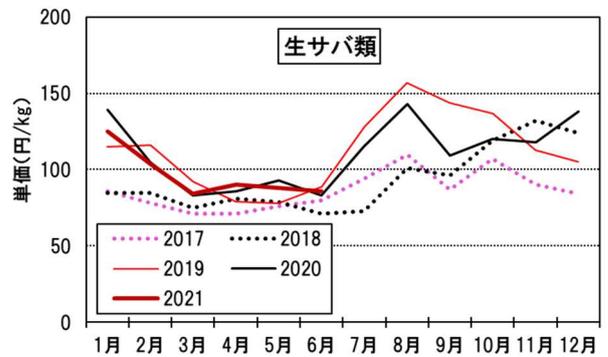


図7. 2017～2021年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

(3) マアジ

マアジの全国主要港における本年6月末現在の水揚量は3.7万トン(太平洋側0.4万トン、東シナ海・日本海側3.3万トン)で、前年同期(4.7万トン)を下回った(図8)。日本海側では5月ごろから浜田沖で漁獲が続き、浜田港における6月の水揚量は前年を上回った。東シナ海側では5～6月は中南部海域で操業が行われたが、水揚量は前年を下回った。今後は年度後半まで低調な漁況が続くと考えられる。価格は近年では中位水準で推移した(図9)。

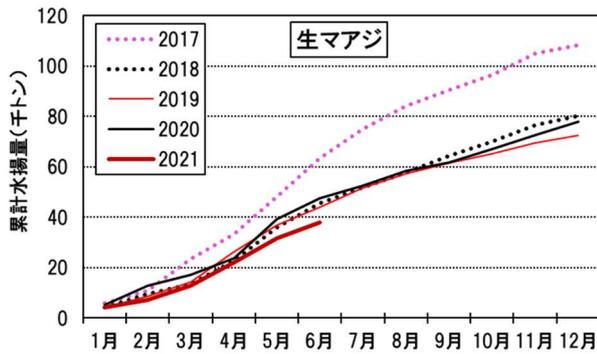


図 8. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚量の推移

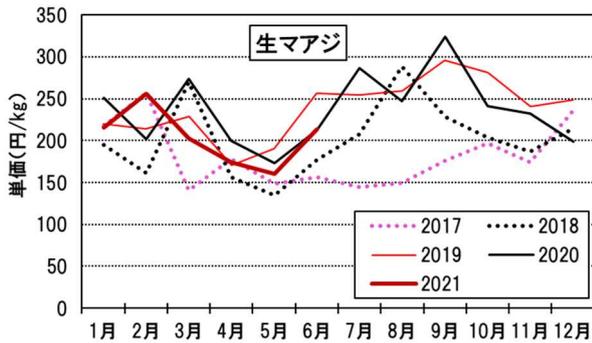


図 9. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移

(4)カツオ

カツオは前年と同様 2 月上旬から竿釣り漁がはじまった。例年春先は伊豆・小笠原海域での漁獲物が房州勝浦に水揚げされるが、本年は小笠原周辺海域での漁獲が伸びず、3 月は九州・沖縄海域で好漁となり、鹿児島の水揚量が全国一位となった(1,487 トン、前年比 390%)。4 月は紀伊半島沖・土佐湾沖・伊豆諸島海域で漁場が形成され、鹿児島と房州勝浦への「小」および「中小」サイズ主体の水揚量が増加した。5 月以降は房総南東沖から常磐沖へと漁場は順調に北上し、6 月までの全国水揚量は 13.7 千トン(前年比 220%、図 10)で、前年とは打って変わって全国的に好漁となった。まき網は 5 月から水揚量が急増し、6 月の全国水揚量は近年では最高水準(9,644 トン)となった(図 12)。一方価格の面では、本年は九州・沖縄海域を北上する群れが好漁で、その後も各地沿岸で好漁が続いたことから安値が続き、6 月に竿釣り 181 円/kg、まき網 171 円/kg まで下落した(図 11、13)。今後も黒潮続流からの暖水が東北沖に分布

するとみられ、東北沖を中心に漁獲量は安定し、秋の戻りカツオも期待できる。価格も秋に向けてやや回復すると期待されるが、外食や観光需要の回復が待たれる。

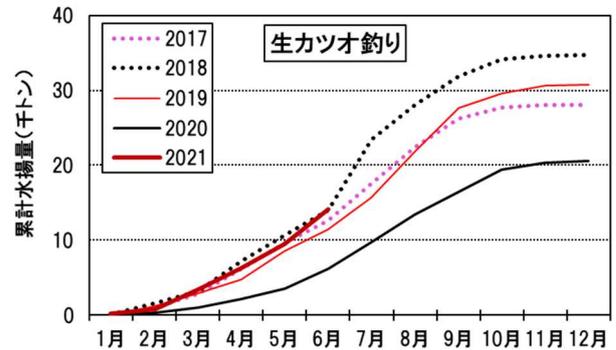


図 10. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別水揚量の推移

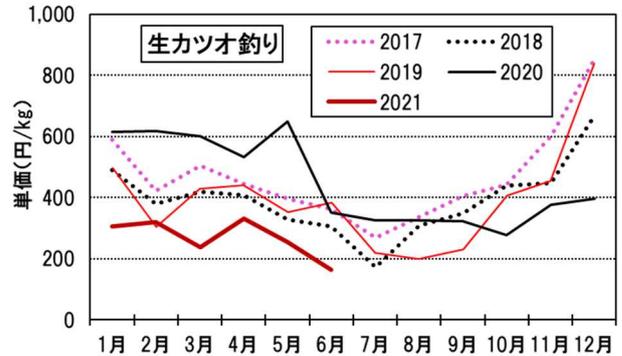


図 11. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別単価の推移

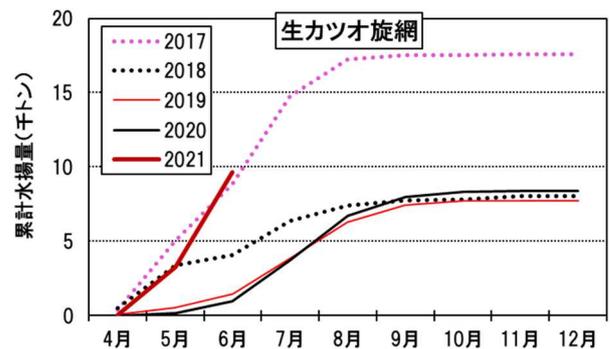


図 12. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別水揚量の推移

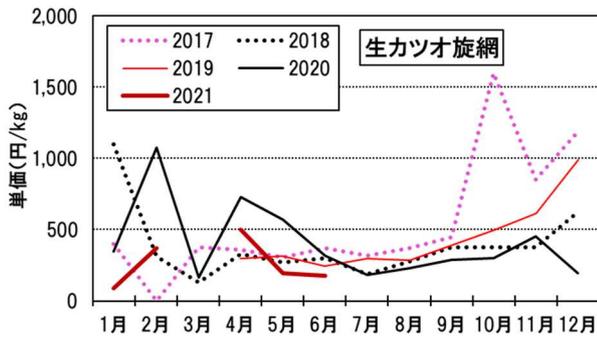


図 13. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮カ
ツオ(まき網)の月別単価の推移

(5)ビンナガ

ビンナガの全国主要港における本年 6 月までの
累積水揚量は 5 万 5 千トンで、好漁だった前年の
72%にとどまったが、2019 年以前と同程度となった
(図 14)。紀伊勝浦における小型沿岸延縄の漁獲
物の体重組成によれば、本年は前年と同様に 4 歳
魚の割合が多かった。竿釣りでの漁獲は 5 月から
始まり、漁場は前年同様に黒潮続流の南側に形
成されたが漁獲量は伸び悩んだ。価格は 1～3 月
は 300 円/kg 前後を推移し、近年では安かったが、
4 月以降は例年並みの 350 円/kg 前後となった(図
15)。7 月以降は竿釣りでの漁獲はほぼなくなっ
ているが、今後も沿岸の延縄などの漁獲が続くため、
若干の上積みが可能である。

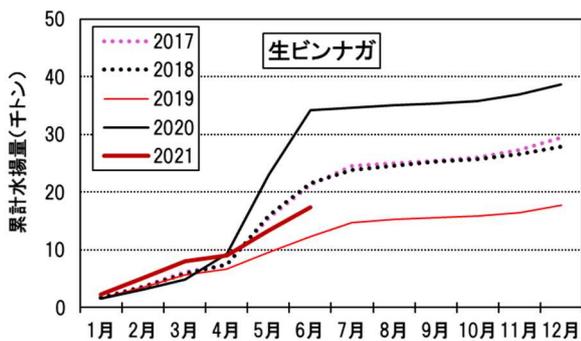


図 14. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮ビ
ンナガの月別水揚量の推移

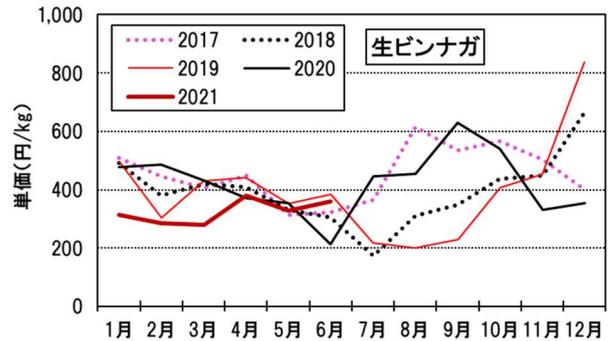


図 15. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮ビ
ンナガの月別単価の推移

(6)スルメイカ

生鮮スルメイカの全国主要港における本年の 6
月末現在の水揚量は 3.5 千トンであり、前年同期
(8.3 千トン)を 6 割下回り、2016～2019 年同期の
平均値(6.0 千トン)を 4 割下回った(図 16)。

北陸の富山湾の定置網による、1～4 月の産卵群
の漁獲量が 2.0 千トンと好調(当センターの集計対
象外であるが、当センターの集計の 5 割に相当)
であった。

秋季発生系群は、例年 5～6 月に能登半島沿岸
で小型いか釣りの漁獲対象となる。水揚げの主体
である金沢港では、入港隻数は例年並みの 60～
110 隻/日であったが、水揚箱数は 4 千～7 千箱/
日と例年の 1/2～1/3 と低調であった。能登半島
以北のスルメイカの分布は非常に薄く、平年に比
べ石川は 4 割、新潟は 4 割、山形は 2.5 割の水揚
量と低調な漁況で推移した。金沢港では、発泡 5k
g 入 30 尾入～バラ入サイズが 7～8 割と大半で、
25 尾入 2 割、20 尾入数%。山形ではバラ入 6 割、
30 尾入 4 割と、例年より小型サイズが目立った。

生鮮スルメイカの価格は、小型いか釣りの水揚
げの不振を反映し、5～6 月に高止まりした(図 17)。
大和堆～隠岐堆等を主漁場とする冷凍スルメイ
カの本年の水揚量は 2.3 千トンで、前年(1.0 千ト
ン)、2017～2020 年同期の平均値(1.3 千トン)を上
回った(図 18、山陰沖の南下滞留群を対象とした、
年明けの昨漁期分を含む)。

本年 1～3 月の冷凍スルメイカの価格は、長期
に及ぶ高値疲れや富山湾の生鮮定置物の好漁も
あり、安値となった(図 19)。

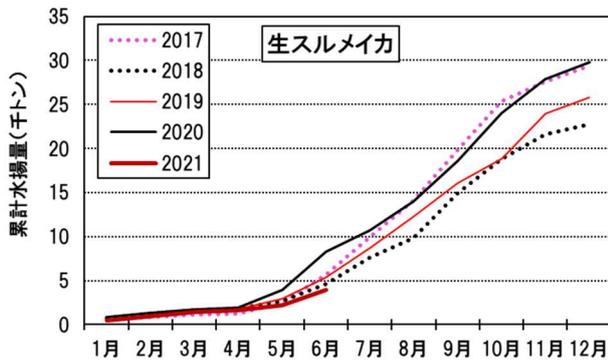


図 16. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別水揚量の推移

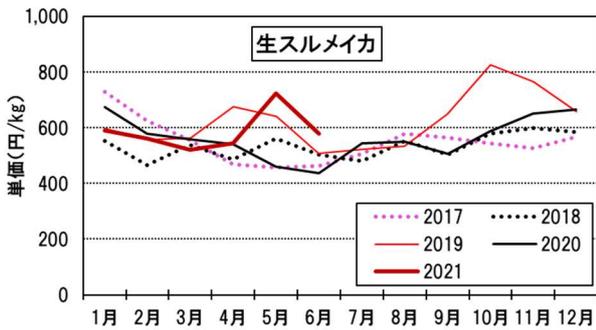


図 17. 2017～2021 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別単価の推移

中型イカ釣り船は、今期は 6 月上旬に大和堆に出漁したが、スルメイカ群が全くいないことから、山口・見島沖に廻り、シロイカ(ケンサキイカ)混じりの漁を行ったほか、小型船が操業する能登半島輪島沖で、スルメイカ漁を行なったが、0.2～0.5 トン/日・隻と低調な漁況であった。しかし 7 月上旬後半からは大和堆で 4～5 トン/日・隻とまとまった漁がみられ、漁況の好転の兆しが見えている。日本海全域で表面水温が例年より高く、能登半島以北では 3～4℃高めと顕著で、群れが大陸寄りの沖合域を一気に北上したと推察される。日本海沿岸の小型船の漁は当面は悪いものの、沖合の中型船は年々漁獲が大幅に落ち込む中、今後は比較的好漁が期待される。

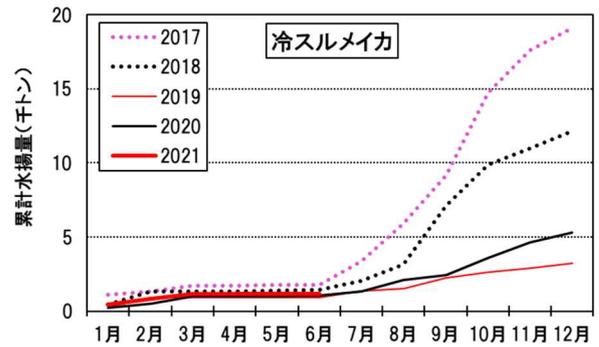


図 18. 2017～2021 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別水揚量の推移

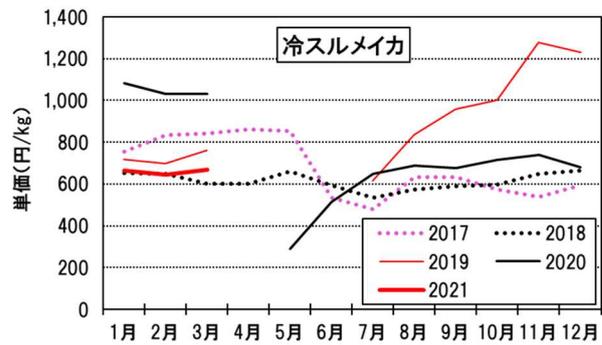


図 19. 2017～2021 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移